



福島の状況を受け、郵付でも、郵政の体制による甲状腺検査が滞った。(2017年、江戸川区 撮影/大野龍彦)

小児甲状腺がん 何が起きているか

「過剰診断」論議の裏で

白石草
28年の子もたち(など)
著「北米、チェルノブイリ」
シヤーナリスト大賞受賞。著
キョウト「東電子レヒ会議、49時間の記録」で科学
エッセイに独立メディア「OZ」で設立。映像、映画
しりし、はじめ「シヤーナリスト」放送局勤務を経
て2002年に独立メディア「OZ」で設立。映像、映画
キョウト「東電子レヒ会議、49時間の記録」で科学
シヤーナリスト大賞受賞。著
著「北米、チェルノブイリ」
28年の子もたち(など)
白石草

「こんにちは。里美の結果ですが、悪性腫瘍の疑いでした。今月末に造影CTをすることになりました」
今年一月九日、私の携帯に短いメッセージが届いた。
送ってきたのは、福島県の中通りに暮らす四〇代の母親だ。一人娘の里美さんが成人式を迎え、前日には華やか

が経過し、再発は現実のものとなった。

再発の兆候は、手術一年後の診断です

にであった。超音波検査をしたところ、

残っていた左側の甲状腺に五ミリを超え

る結節(しり)が見つかったのだ。

「大丈夫だった。しかし、どこか依然

としない気持ちが残った。三カ月おきの

診察では、毎回「心配ない」と告げられ

るが、詳しい説明は聞けずもどかしい。

血液検査の結果やエコー画像を求めたか

断られ、家族の不安は続いた。

そんなやり取りが二年ほど続いた昨年

夏、これまで三カ月毎だった診察が、六

カ月間隔へと変更となった。結節に大き

な変化が見られないというところが、その

理由だった。

ところがである。久々に受診したところ、

エコー画像に映った左葉の結節が、

八ミリから三ミリへと、半年で五ミリ

も成長していた。甲状腺がんの腫瘍マ

ーカーであるサイログロブリンの数値も増

加しているという。

がん再発が現実にかん

福島県の中通りに住む園田里美さんは、三年前、県の検査で九ミリの甲状腺がんが見つかった。腫瘍径は小さいが、皮膜外に浸潤し、リンパ節にも転移している可能性もあるという。家族は「早くとってほしい」と希望したが、「そんなに大きくないので半年後くらいに取りましょう」と医師に諭され、手術は春休みに先送りすることになった。
八カ月後の手術は、ちょうど里美さんの一七歳の誕生日と重なった。里美さんの誕生日は、小学校の頃からカラオケボックスで賑やかに過ごしてきたが、この日は、味気ないパースティとなった。手術は出血もなく無事終了。ほとんどの術は東の間、その医師が家族にかけた言葉は、予想外のものであった。
「なぜここまで放っておいた。再発する可能性がある」
母親は言葉を失った。手術を先延ばししたのはその医師である。それから三年

「とっつしまえば大丈夫」という言葉は裏切られた。里美さんの母親は、一回目手術が遅かったことが再発後に影響したのではないかと疑っている。

一九三例の甲状腺がん

福島県では、二〇一一年一月から甲状腺検査が行われている。対象は、原発事故当時一八歳以下だった三八万人。チェルノブイリ原発事故後、小児甲状腺がんが増えたという事実に基づき開始された。

甲状腺に対する超音波スクリーニングを二年ごとに行い、その結果は三カ月ごとに開催される県民健康調査「検討委員会」で公表されている。一巡目で甲状腺がんと診断されたのは一六八、二巡目で七一人、三巡目はまだ検査の途中だが、すでに本稿執筆段階で七人が甲状腺がんと診断されている。以上のうち一六〇人がすでに手術を終え、術後に良性結節と診断された一人を除く一五九人が甲状腺がんと確定している。

国立がん研究センターがん統計研究部の推計では二〇一五年秋の時点で、通常の罹患率と比べ、男性で九〇倍、女性で五二倍多いという。これは、三八万人の受診者が三五歳になるまでに診断される甲状腺がん全てを前倒して見つけてしまったことになる数値である。検査により、症状が出現する前の潜在的な病気を発見することを「検診委員会」の下部組織である「甲状腺検査評価部」は「被ばくによ